

変異する資本主義 2022-2-7

「変異する資本主義」については、そもそも、「資本主義」について、あらかじめ明確にしておかなければならない。

このジョゼフ・アロイス・シュンペーターの定義によれば、資本主義とは、次の三つの特徴を有する産業社会のことである。

第一に、物理的生産手段の私有

第二に、私的利益と私的損失責任

そして、第三に、民間銀行による決済手段（銀行手形あるいは預金）の創造、である。

このうち、第三の特徴（民間銀行による決済手段の創造）は、資本主義の定義の中でも特に重要とされる。

第一と第二の特徴はあっても、第三の特徴が欠けているような社会は「商業社会」ではあるが、「資本主義」ではないとシュンペーターは云うのである。

なるほど、「資本主義」をその内部から創造するシステムだから、「資本主義」というわけだ。

「資本主義」は、しばしば「社会主義」の対義語として用いられる。

では、社会主義とは何かといえば、シュンペーターは、「生産過程の運営を何らかの公的機関に委ねる制度」という程度の定義しか与えていない。

彼のいう「社会主義」には、より平等な社会構造であるかどうかとか、

民主的か、権威主義的か、とかいった意味合いは、込められていない。

シュンペーターは、「社会主義」をあくまで経済分析のための概念として扱っているのであって、そこにイデオロギー的な価値観を持たせることを拒否しているのである。

また、シュンペーターは、「資本主義」や「社会主義」という概念を、いわゆる「理念型」と考えていることにも注意が必要である。

すなわち、現実の経済システムには、純粋な資本主義も、純粋な社会主義もない。

現実の資本主義は、程度の差こそあれ、いずれも、公的な経済運営や公的な経済計画といったものを含んでいる。

それゆえ、現実に存在する経済システムは、「資本主義」か、「社会主義」か、ではなく、すべて、純粋な資本主義と純粋な社会主義の間のいずれかの状態にあるもの、とみなすべきである。

同じく重要な点は、シュンペーターが、資本主義というものを、特定の固定的な社会システムとしてではなく、経済が変化して行く「過程」として捉えることである。

例えば、現実の資本主義の中には、封建社会の制度の一部が残存しているし、

同時に、公的な経済管理という社会主義的な要素も含まれている。

それと言うのも、資本主義が移り行く「過程」だからなのである。

本書では、このようなシュンペーターの理解に従って、議論を進めていこう。

すなわち、「資本主義」とは、物理的生産手段の私有、私的利益と私的損失責任、民間銀行による決済手段の創造、という特徴を備えた産業社会である。

他方、「社会主義」とは、生産過程の運営を何らかの公的機関に委ねる制度である。

そして、現実の経済システムは、純粋な資本主義と、純粋な社会主義の中間形態である。

また、資本主義は、その本質からして、「過程」である。

言い換えれば、資本主義は、普段に「変異」し続けるものなのである。

さて、我々が参照したシュンペーターの議論というのは、1943年、すなわち、第二次世界大戦中に発表された「戦後世界における資本主義」という論文において展開されたものである。

この論文の主な目的は、世界大戦という総力戦が、社会の進化に大きな影響を及ぼす可能性に注意を促すことであった。

シュンペーターは、総力戦がもたらした衝撃によって、戦後世界の資本主義は、戦前のそれとはまったく異なるものへと変異するであろう、と予見したのであった。

もっとも、資本主義は、既に戦前から変異しつつあった。

その変異とは、大企業組織の出現である。

大企業組織は、その巨大で合理的な経営管理機構によって優位に立ち、中堅・中小企業を市場から駆逐して行った。

しかし、これまで資本主義を支えていたのは、こうした中堅・中小企業の自営業者たちの自立的な精神である。

彼らは、政府による経済介入に対しては、政治的に断固として抵抗してきた。

ところが、こうした中堅・中小自営業者たちを、資本主義の変異によって生み出された大企業組織が駆逐して行くというのである。

というのは、政府の経済管理に抵抗する勢力も失われるということである

言い換えれば、資本主義は、変異によって、自らの基盤を破壊する大企業組織を生み出し、そして自滅する方向へと向うということだ。

自滅の先にあるのは社会主義である。

シュンペーターといえ、イノベーションの理論家として、今日でも、ビジネス界では人気の経済学者である。

しかし、そのシュンペーターが資本主義について抱いていたビジョンとは、いずれ自滅し、社会主義化する運命にあるというものだったのである。

その資本主義の自滅の兆候は、1933年には既に現れていたと、シュンペーターは考えていた。

すなわち、世界恐慌期のアメリカにおいて、フランクリンルーズベルト政権が実施したいわゆるニューディール政策である。

このニューディール政策によって、アメリカ政府は、公共投資をはじめとする政府の経済介入を著しく強化した。

このような反資本主義的な政策が実現されたのは、これに対する政治的な抵抗が、さほどなかったからである。

なぜなら、その抵抗勢力たる中堅中小の自営業者たちは、大企業組織の出現によって既に弱体化していたからだ。

そして、第二次世界大戦の総力戦によって、政府による経済統制は、徹底的に強化された。このことは、この資本主義の自滅傾向に拍車をかけることになるだろう。

戦後は、戦時中の軍事需要が消滅することで、深刻な不況が到来することが予想される。その戦後不況を克服するために、戦前の制作手法、すなわち、公共投資によって、政府が所得を生み出す政策が活用される。

さらに、政府の財政出動を補完するべく、効率で累進的な税制が投入されたろうが、それが民間の資本蓄積を困難にする。

また、賃金、労働時間、労働規律といった問題は、民間ではなく、政治が決めるものとなる。そうすると、資本主義は、政府が所得を生み出す政策である積極財政を、恒常的に実施しなければならなくなるだろう。

シュンペーターは言う。

そのようなシステムは、なお資本主義と呼ばれるものであろうことは、疑いない。

しかし、それは人工装置によって生き長らえ、過去の成功を担保してきた昨日の全てがマヒした酸素吸入器の資本主義なのである。

酸素吸入付きの資本主義。

新型コロナウイルスのパンデミックを経験したばかりの我々には、以下に意味深長に響く言葉ではないか。

さて、本書の目的はシュンペーターの学説、それ自体を論じることではない。

しかし、資本主義とは、経済変化の過程であり、

時間とともに変異して行くものだ、という彼の基本的理解を共有するものである。

また、本書は現代の資本主義の変異を理解するために、経済学に止まらず、政治学、社会学、あるいは国際関係論など、さまざまな社会科学を広範に動員し、学際的、かつ多角的な議論を進めようとする。

その点においてもシュンペーター的であると言えるかもしれない。

それでは、本論に入る前に、移行の議論の流れを簡単に述べておく。

第一章では、2021年に成立したアメリカのジョー・バイデン政権が打ち出した一連の経済政策の意義について検討する。

それは、過去40年にわたって支配的であった新自由主義から決別しようとする画期的なも

のと評価される。

ちなみに、新自由主義とは、自由市場こそが経済厚生を高める最良の手段である、という信念に基づき、政府の経済介入を極力少なくすべきであるというイデオロギーのことである。

第二章では、近年、経済学者の間で行われている「長期停滞」をめぐる論争について解説する。

「長期停滞」とは、アメリカの著名な経済学者ローレンス・サマーズが提起した問題で、現代の先進国経済が低成長から抜け切れなくなっているのではないかというのである

この「長期停滞」の原因を巡っては、さまざまな議論が提出されているのであるが、我々は、この論争を追うことを通じて、主流派経済学が孕む根本的な理論的欠陥を知ることになる。

第三章は、主流派経済学の欠陥を克服した「ポスト・ケインズ派」の理論に基づき、長期停滞の真相に迫る。

参考にするのは、ポスト・ケインズ派の経済学者の一人であるエクハルト・ハイン、

そして、彼が依拠するジョセ・フシュタインドルやミハウ・カレツキの理論である。

その結果、長期停滞の根本原因が、「**金融化**」(**金融部門の支配力が肥大化する現象**)にあり、その金融化をもたらしたのは新自由主義であることが明らかとなる。

しかし、第一章で論じるように、バイデン政権は、この新自由主義からの脱却を試みようとしているのである。

なぜ、今、バイデン政権は、新自由主義を超克しようとしているのか。

第四章は、その答えを探る。

そして、バイデン政権の政策転換の背景には、新型コロナウイルスのパンデミック、

そして、中国の台頭という地政学的な変化があったことが明らかにされる。

第五章は、その地政学的な変化の様相が分析される。

ここで動員されるのは、国際政治学のリアリズムの理論である。

リアリズムによれば、現在、我々が目のあたりにしている地政学的な環境の変化とは、アメリカと中国の間の東アジアの覇権をめぐる抗争である。

第六章では、その米中の静学的構想を理解するため、

現代の戦争の意味について議論する。

そして、現代の戦争とは、軍事と非軍事の境界線を曖昧にした「ハイブリッド戦」であり、特に中国が、このハイブリッド戦を得意とし、

経済をも戦略手段として行使している、という分析が示される。

その上で、中国が仕掛けるハイブリッド戦が、アメリカ、そして日本にどのような意味を持つかについて、検討される。

最終章では、以上の議論を踏まえ、**資本主義が、米中対立という地政学的な環境変化を受けて、どのように変異して行くのか**、その予想が示される

それは、社会主義へ向かって変異するだろうという予想である。

その変異の経路については、シュンペーターの予想とは異なる。

しかし、結末においては、彼と一致するのである。